

創世記20-21章 「さらなる信仰の試み」

1A 妻サラを妹とする偽り 20

1B 脅し、守る神 1-7

2B アビメレクの叱責 8-13

3B アブラハムの祈り 14-18

2A 神の約束の成就 21

1B 肉を切る痛み 1-21

1C みことばの成就 1-7

2C 肉の息子の追放 8-13

3C 声を聞かれる神 14-21

2B 祝福ゆえの誓い 22-34

1C 神の証し 22-24

2C 井戸の誓い 25-34

本文

創世記 20 章を開いてください。私たちは前回、主が、サラに対して、来年の今ごろ、男の子が生まれている告げ、また、ソドムとゴモラを滅ぼされたところを読みました。アブラハムは必死に執り成しましたが、ソドムは、かまどの煙のように、煙が立ち上っていました。その後、アブラハムがどのように動いたかを見ていきます。

1A 妻サラを妹とする偽り 20

1B 脅し、守る神 1-7

^{1a} アブラハムは、そこからネゲブの地方へ移り、カデシュとシュルの間に住んだ。

アブラハムは、遊牧の生活をしていますが、それでもある程度、同じところに定住している地点がありました。初めは、ベテルとアイの間のところでした。そこに主が現れてくださり、祭壇を献げたのです。ところが、ロトの飼っている牛や羊もいて、そこは狭くなりました。それで、ロトはソドムに近いところ、ヨルダンの低地へと動きました。その時に、主は語られ、この地を縦と横に動きなさい、すべてがあなたに与えていると約束されています。

そこから、ヘブロンに移っています。エルサレムよりも南にあり、高低差でもエルサレムより高いです。なぜ、そこに移ったのか？ヨルダンの低地を見下ろすことができるようなところにあります。前回の学び、18 章 16 節で、「その人たちは、そこから立ち上がって、ソドムの方を見下ろした」とあります。もしかしたら、アブラハムは甥のロトのことを気にして、ヨルダンの低地を見下ろせるところを選んだのかもしれませんが。

そして今、彼がなぜ、ネゲブの地方に移ったのか？カデシュとシュルの間を選んだのか？ということ。これからのアブラハムの行動が、あまりにも自暴自棄に見えます。すでにサラはイサクを身ごもっているかもしれない、あるいはこれから身ごもろうとしている時、なんと、その地方の首長である、ゲラルの王アビメレクに彼女を妻として渡してしまうのです。

彼には、一種の「霊的な疲れ」があったかもしれません。アブラハムは、甥のロトのことを思って生きてきました。ロトのために、ソドムの町が赦されるように必死に祈りました。しかし、次の日の朝には、かまどのように煙を上げているソドムを見ました。ロトはどこにいったのか、分からなくなっていることでしょう。彼は、ヘブロンから見えるソドムを見たくなかったのではないかと思います。そして、山地から降りて平地の方に行ったのではないかと思います。

カデシュとシュルの間と言っていますが、カデシュは、後にイスラエルの民が十二人のスパイを遣わすのがカデシュで、シュルは、エジプトの方に向かう地中海沿いの荒野です。つまり、ユダ山地を降りて、南東に行きます。今でいうと、ガザ地区の南に広がっている地域です。当時は「ペリシテ人の地」と呼ばれます。

思い出すに、ダビデが同じように、ペリシテ人の地に住んだことがあります。サウルから逃れるために、イスラエルの敵であるペリシテ人の領主のところに逃れたのです。初めに行った時は気違いのふりをして難を逃れました。次に行った時は、サウルから逃れて、これまで信仰によって救われていったけれども、この緊張状態が続く生活に疲れが出てきてしまったのかもしれません。ガテの王アキシウのところでは家来として働くのです。偽りの生活に陥りました。

しばしば、霊的に燃え尽きてしまうという問題が言われますが、私は霊的に疲れてしまうということのほうが身近に感じます。エリヤも同じでした。バアルの預言者との対決で大勝利を収めた後に、イゼベルの脅しでひたすら逃げて、なんとシナイ山まで行ってしまったのです。この疲れの原因は何か？それは、自分が必死に主にしがみついているので、それで疲れてしまっているのです。けれども、実は、自分がしがみついている前に、主が決して自分を見放さない、支えておられて、守っておられるということなのです。自分が弱くなっている時でも、主は共におられて、守っておられるということを思い出すが、霊的な疲れから休養を取り、力を得ることができます。

ここ 20 章は、そのような霊的な疲れを覚えているアブラハムに、主ご自身がそれでも共におられて、その恵みによって守られる姿を見ます。

^{1b}ゲラルに寄留していたとき、²アブラハムは、自分の妻サラのことを「これは私の妹です」と言ったので、ゲラルの王アビメレクは、人を遣わしてサラを召し入れた。

ゲラルは、ちょうど今のガザ地区のすぐ東にある町です。もっと東に行けば、ベエル・シェバとい

う町があります。そこに行った時に、アブラハムは再び同じ過ちを犯しました。妻なのに、妹だと偽ったのです。そして、そこには王アビメレクがいました。アビメレクは、エジプトのファラオと同じで、個人名ではなく、王の位の名称です。

アビメレクは、彼女を妻として召し入れました。これが、彼女が若さを取り戻したという意見もあります。それはあり得るでしょう。アブラハムにもサラにも生殖機能を神が回復させていますから、彼女も若返ったのだと思います。けれども、アビメレクが妻に召し入れる大きな理由は、アブラハムが、多くの牛や羊を持ち、しもべたちも多く、有力な遊牧民の長になっているからです。その時に、双方の間に手を取り早く平和を持つための方法は、結婚です。政略結婚ですね。

そして、これが、エジプトに下ったのと同じことでした。アブラハムは、また異なる試みですが、その試みに失敗しています。以前は、飢饉でした。それで豊かなエジプトへと行きました。ここでは、ソドムが滅ぼされて、心が疲れて、それでそこから離れたところに住んで、その時に、過去の過ちを繰り返して行っているのです。私たちにもありませんか？主を信じて歩む生活で、疲れてしまっ、その時に過去の古い習慣に陥ってしまう、ということです。

しかも、ここではもっと、厳しい状況です。サラの胎には、すでにアブラハムの種があります。身ごもるか、もう身ごもったか、してしていました。その時に、アビメレクの子種が入ってしまうことになります。約束の子孫の確証が、ここで一気に崩れてしまいそうになっています。とてつもない、恐ろしいことをアブラハムは、やっています。

³ その夜、神が夢の中でアビメレクのところに来て、こう仰せられた。「見よ。あなたは、自分が召し入れた女のために死ぬことになる。あの女は夫のある身だ。」

主がすぐに、ご介入されました。主は、まことの神を信じていない異教徒であっても、アブラハムのゆえに現れてくださいました。そして、ここで「死ぬことになる」と訳されていますが、多くの訳が、「おまえは、もう死んでいる(You are a dead man)」と訳しています！

⁴ アビメレクは、まだ彼女に近づいていなかった。そこで彼は言った。「主よ、あなたは正しい国民さえも殺されるのですか。⁵ 彼が私に『これは私の妹です』と言ったのではありませんか。彼女自身も『これは私の兄です』と言いました。私は、全き心と汚れのない手で、このことをしたのです。」

アビメレクが訴えているのは、潔白さです。アブラハムだけでなく、サラからも兄弟関係であることを確かめているのです。それで、妻に召し入れました。全き心、すなわち心において潔白であり、また、汚れのない手、つまり、不法に、彼女に手を出していないということです。

⁶ 神は夢の中で彼に仰せられた。「そのとおりだ。あなたが全き心でこのことをしたのを、わたし自

身もよく知っている。それでわたしも、あなたがわたしの前に罪ある者とならないようにした。だからわたしは、あなたが彼女に触れることを許さなかったのだ。

神は、実は、アビメレクに対しても、結婚をしたのに何らかの形で、彼女のところに入るのを遅らせていたようです。いつもと違って、アビメレクは何かの事情で、なかなか彼女のところに床入りできていなかったのですが、それは主がそうさせておられたのです。

⁷ 今、あの人の妻をあの人に返しなさい。あの人は預言者で、あなたのために祈ってくれるだろう。そして、いのちを得なさい。しかし、返さなければ、あなたも、あなたに属するすべての者も、必ず死ぬことを承知していなさい。」

アブラハムのことを、主は「預言者」と呼ばれています。預言者とは、神のことばを預かっている人です。そして、その人が祈れば、祈りが聞かれるとも主は言われます。ヤコブの手紙で、「5:16 正しい人の祈りは、働くとき大きな力があります」とありますが、まさにアブラハムをそのように立てておられるのです。

ここでの問題は何か？アブラハムは、自分について、自暴自棄になっているか、きちんと信仰によって歩んでいないけれども、それでも神はアブラハムを召して、預言者として立てていることです。これは、エリヤの時もそうなんです。エリヤは、「もう十分です。私のいのちを取ってください（Ⅰ列王 19:16）」と、自殺願望まであったのですが、主は、まだまだ彼にさせることがありました。アラムのハザエルに油を注ぎ、エフーにも油を注いで、イスラエルの王とします。また、エリシャに油を注いで、次の預言者にします。アブラハムも同じです。彼には、周囲の異教徒に対して、神の預言者となり、また祈り者であるように、主は召しておられたのです。

自分はだめだ、自分は取るに足りない者だと、打ちひしがれている時に、まさにその時に、主が尊く私たちを用いられている、ということがあります。

2B アビメレクの叱責 8－13

⁸ 翌朝早く、アビメレクは彼のしもべをみな呼び寄せ、これらのことをすべて語り聞かせたので、人々は非常に恐れた。

ここですごいのは、神がアブラハムの偽りにも拘らず、それを超えて、ご自身に恐れを抱かせたことです。しもべの不従順にも拘らず、主はご自身の真実を不信者に明らかにされました。預言者ヨナもそうでしたね、彼は不従順でしたが、彼を通して、天地を造られた神がおられて、この嵐を引き起こしていることを船にいる人々が知り、神を恐れ、いけにえまで献げました。

⁹ アビメレクはアブラハムを呼び寄せて言った。「あなたは何ということを私たちにしたのか。私がい

つたい、罪となるどんなことをあなたにしたというのか。あなたが、私と私の王国に大きな罪をもたらそうとするとは。あなたは、してはならないことを私にしたのだ。」

ペテロ第一の手紙に、こんな言葉があります。「Ⅰ ペテ 2:20 罪を犯して打ちたたかれ、それを耐え忍んでも、何の誉れになるでしょう。しかし、善を行って苦しみを受け、それを耐え忍ぶなら、それは神の御前に喜ばれることです。」アブラハムの場合、アビメレクから厳しい叱責を受けていますが、彼自身が、アビメレクが罪を犯すようにさせたのですから、全然、栄誉なことではありません。不名誉なことです。けれども、時に我々、キリスト者は、キリスト者ではない人から、正しい叱責を受けることがあります。それが主からのものとして、甘んじて受け入れなければいけません。

¹⁰ また、アビメレクはアブラハムに言った。「あなたはなぜ、こんなことをしたのか。」¹¹ アブラハムは答えた。「この地方には、神を恐れることが全くないので、人々が私の妻のゆえに私を殺すと思ったのです。¹² また、本当に、あれは私の妹、私の父の娘です。でも、私の母の娘ではありません。それが私の妻になったのです。¹³ 神が私を父の家から、さすらいの旅に出されたとき、私は彼女に、『このようにして、あなたの真実の愛を私に尽くしてほしい。私たちが行くどこでも、私のことを、この人は私の兄です、と言ってほしい』と言ったのです。」

これが、アブラハムが、エジプトにおいても、そして今、ここゲラルにおいても、同じ偽りを語った理由になっています。一つは、「神を恐れることが全くない」ということです。そしてもう一つが、「また、本当に、あれは私の妹、私の父の娘です。でも、私の母の娘ではありません」ということです。これは、アブラハムに良心の呵責を抱いてほしいです。すべての真理を伝えなければ、それは嘘です。彼は、ぎりぎり嘘を付かないようにと思っていたのでしょうか。でも、姑息な手段です。そして三つ目が、前もってアブラハムが妻サラに、そのように伝えていたということです！

このことを、現実の世界との兼ね合いで見たいと思います。現実の世界というのは、ここでは、事実、アブラハムの懸念は、その通りだということです。神を恐れることはないために、女がほしければ、その夫を殺してでも奪い取るということは、当たり前になされていたのでしょうか。そうしたら、サラは結局、相手の妻になるということです。それで、アブラハムは自分の頭で知恵をしばって、自分の妹だと言いなさいと、言いつけていました。そうすれば、彼女は生き残ります。そして自分も生き残ります。

これの何がいけないのか？異教徒の中に生きていく中で、それでも、まことの神の憐れみと守りがあるのだということを彼は信じていない、ということです。アブラハムは、神がそう言われた通り、神の預言者であり、証し人なのです。ですから、周りの人々がいかに悪い習慣があっても、神が証しされて、一定の敬意を見せてくれるのです。それなのに、自分自身が殺されるかもしれないと思って、神の憐れみがあるのに、まるで相手を信用せず、対抗策を造っていたということです。

これを分かりやすく言いましょう。例えば、日本の葬式は大半が仏式です。そこでは、必ず偶像礼拝が行われています。そこで、どうせそこでは悪しき偶像礼拝が行われているのだから、その出席しないようにするために、「風邪をひいてしまって、寝込んでいます」と言ったとします。ちょっと疲れているから、風邪にしていこうとして、ごまかします。けれども、他の人が、自分が具合悪くなっていないことが明らかになりました。つまり、偽っていたことが伝わります。「どうせ偶像礼拝をしているのだから」と言って、嘘、偽りという他の罪を犯しているのです。

未信者の方々、一般の方々が、確かに霊的には世に生きており、世の神は悪魔ですから、闇の中にいます。しかし、聖書は、「ロマ 12:18 自分に関することについては、できる限り、すべての人と平和を保ちなさい。」と教えています。そして、すべての人を敬いなさいとも教えられています。未信者の方々にも、神が、私たちのゆえに憐れみをもって働きかけることを忘れてはいけません。その憐れみを信じて、信仰をもって、不利な状況に見えるようなところにも踏み出す勇気が必要です。

3B アブラハムの祈り 14-18

¹⁴ アビメレクは、羊の群れと牛の群れと、男女の奴隷たちを連れて来て、アブラハムに与え、またアブラハムの妻サラを彼に返した。¹⁵ アビメレクは言った。「見なさい。私の領地があなたの前に広がっている。あなたの良いと思うところに住みなさい。」

アビメレクは、夢の中ではっきりと現れた神を恐れしました。それで、異教徒ではあるものの、その畏敬の思いから、多くの贈り物をアブラハムに与えました。ちょうどかつてアブラハムが、メルキゼデクの祝福に対して、彼に十分の一を献げたのと似ています。本来なら、偽ったアブラハムに対して何か罰を与えてもおかしくないです。けれども、それよりも、ずっとずっと神がアブラハムにおられることが彼にはわかったので、恐れを抱いて、献げています。

そしてこれは、アブラハムへの神の祝福の約束を、アビメレクは体感していたからです。「あなたをのろう者はのろわれ、祝福する者は祝福される」であります。神は、恵みをもってアブラハムを召しておられるので、彼が、偽ったという不敬虔なことをしていても、その祝福が妨げられることはなかったのです。

¹⁶ サラに対しては、こう言った。「ここに、銀千枚をあなたの兄に与える。これはあなたにとって、また一緒にいるすべての人にとって、あなたを守るものとなるだろう。これであなたは、すべての人の前で正しいとされるだろう。」

これは、アビメレクが自分の身の潔白を明らかにしたかったことと、サラにもそれを証拠にしておきたかったことがあると思います。人の妻なのに、アビメレクのところに入ったという汚点が彼女に、一生付きまとうことになります。けれども、そんなことはない、きちんと銀千枚で結納金を相手が支払っていたのだ、結婚の正式な手続きを取っていたのだということを示したかったのです。そうする

ことで、人々からのそしりを免れる、「すべての人の前で正しいとされる」ということです。

¹⁷ そこで、アブラハムは神に祈った。神は、アビメレクとその妻、また女奴隷たちを癒やされたので、彼らは再び子を産むようになった。

これが、預言者の姿ですね。神に対して祈ることは、その人にとって義務です。サムエルが預言者として、イスラエルのために祈ることをやめるのは、罪であると言ったことがあります。「Ⅰサム 12:23 私もまた、あなたがたのために祈るのをやめ、【主】の前に罪ある者となることなど、とてもできない。私はあなたがたに、良い正しい道を教えよう。」それが、確執のある相手のためにも、そうなのです。ヨブも、自分のことを言いたい放題いった、友人たちのために祈りました。(42:9)

そして、その祈りが聞かれます。ヤコブが手紙の中で言いました。「正しい人の祈りは、働くとき大きな力があります。(ヤコブ 5:16)」人々のため、未信者の方々のためにも積極的に祈りましょう。

¹⁸ 主が、アブラハムの妻サラのことで、アビメレクの家すべての胎を堅く閉じておられたのである。

「あなたをのろう者は、のろわれる」という、主の言われたことです。サラの胎を自分の子種で汚すことになるので、その呪いが、アビメレクの妻と、そばめにも不妊がやってきていました。けれども、それが今、アブラハムの祈りで癒されています。

2A 神の約束の成就 21

これで、ある意味で、最も大きな試みが過ぎました。サラの胎にイサクが宿っているかもしれないか、どうかということで、アブラハムへの約束の実現が決まります。それを、台無しにするような行為をアブラハムがしようとしたので、神は臨み、強く迫られました。

こうやって見ると、信仰生活というのは、清濁併せ呑むものだと思います。サラに男の子が与えられると信じて、疑わなかったのがアブラハムです。それほど、信仰が増し加えられていました。ところが、最も愚かなことをしてしまったのも同じアブラハムなのです。これは矛盾することではなくて、ありのままの人間の姿なのではないかと思います。不完全な人に働かれる、完全な神の証しです。次に、その約束が完全に成就する、出来事を見ます。

1B 肉を切る痛み 1－21

1C みことばの成就 1－7

¹ 主は約束したとおりに、サラを顧みられた。主は告げたとおりに、サラのために行われた。² サラは身ごもり、神がアブラハムに告げられたその時期に、年老いたアブラハムに男の子を産んだ。

ついに、主が約束をかなえられました。ここで強調されているのは、「**主が約束したとおりに**」「**主は告げられたとおりに**」そして「**その時期に**」とあります。主が言われたとおりに、そのとおりになったということです。アブラハムが 75 歳、サラが 65 歳の時に約束が与えられて、それから 25 年、彼は今、百歳、サラは九十歳です。それでも、主はその言われた通りになさいます。いろいろなことが起こりました。その間、全く、主の言われたことは空夢のように感じることもありました。しかし、主は、その言われた通りになさるのです。イザヤは預言しました。「イザ 55:11 **そのように、わたしの口から出るわたしのことばも、わたしのところに、空しく帰って来ることはない。それは、わたしが望むことを成し遂げ、わたしが言い送ったことを成功させる。**」

そして、ここでの主人公は、サラです。サラを顧みられた、サラのために行われた、そしてサラは身ごもり、とあります。主は、初めは、アブラハムに語っておられました。けれども、三人の旅人の一人として主が現れた時に、サラに直接、語りました。このようにして、サラは祝福された女になりました。同じように、聖霊によってイエスを、みごもったマリアも、直接、御使いガブリエルが語り、祝福された女になりましたね。

³ アブラハムは、自分に生まれた子、サラが自分に産んだ子をイサクと名づけた。⁴ そしてアブラハムは、神が命じられたとおり、生後八日になった自分の子イサクに割礼を施した。

主がアブラハムと契約を結ばれた時、しるしとして行いなさいと命じられたのが、割礼です。主がご自分のことばのとおり行われたのに応じて、アブラハムは主の命じられたとおりに行いました。そのまま、言われた通りに従います。ノアもそうでした、箱舟を造りなさい、箱舟に入りなさい、そして箱舟から出なさいと言われて、そうしました。主のみことばは、その通りに行います。

⁵ アブラハムは、その子イサクが彼に生まれたとき、百歳であった。⁶ サラは言った。「神は私に笑いを下さいました。これを聞く人もみな、私のことで笑うでしょう。」⁷ また、彼女は言った。「だれがアブラハムに、『サラが子に乳を飲ませる』と告げたでしょう。ところが私は、主人が年老いてから子を産んだのです。」

アブラハムも、サラも笑いました。イサクという名前を聞いた時に、神が笑いをくださったことを思い出します。笑わずにはいられないほど、神が、思いをはるかに超えて、彼らの願いをかなえられました。パウロが教会のために祈りました。「エペソ 3:20 **どうか、私たちのうちに働く御力によって、わたたちが願うところ、思うところのすべてをはるかに超えて行うことのできる方に**」

2C 肉の息子の追放 8-13

しかし、アブラハムには、再び試みが与えられます。

⁸ その子は育って乳離れした。アブラハムはイサクの乳離れの日に、盛大な宴会を催した。

当時の乳離れは、おそらく3歳ごろではないかと思います。

⁹ サラは、エジプトの女ハガルがアブラハムに産んだ子が、イサクをからかっているのを見た。¹⁰ それで、アブラハムに言った。「この女奴隷とその子を追い出してください。この女奴隷の子は、私の子イサクとともに跡取りになるべきではないのですから。」

イサクをからかったのは、イシュマエルのことです。しかし、ここでモーセは、「エジプトの女ハガルがアブラハムに産んだ子」と言っています。名前をいわず、しかも、ハガルのことをエジプトの女と呼んで、自分たちの仲間ではないことを言い表しています。イシュマエルを、息子として認めたくないという強い拒否感を感じ取れます。

このイシュマエルが、イサクをからかいました。イサクによって、神のみわざのすばらしさをみなぎっている時に、彼はからかいました。午前礼拝で学びました、これは必然的なことです。肉によって生まれた者は、御霊によって生まれた者、約束にしたがって生まれた者を迫害します。それは、その人が神のものであり、自分はそうではないことを、自ずと見せられるからです。自分がつながっていると思っていたものが、切り離されるからです。(ガラテヤ 4:29 参照)

サラの言っていることは、とても厳しいものです。追い出してください、と言っています。けれども、これは必然的なものです、「私の子イサクとともに跡取りになるべきではない」と言っています。これは、本当にそうです。イシュマエルがこの家にいたままで、イサクが跡取りになることはできないでしょう。水と油のように、混じり合うことはありません。

¹¹ このことで、アブラハムは非常に苦しんだ。それが自分の子に関わることだったからである。¹² 神はアブラハムに仰せられた。「その少年とあなたの女奴隷のことで苦しんではならない。サラがあなたに言うことはみな、言うとおりに聞き入れなさい。というのは、イサクにあって、あなたの子孫が起こされるからだ。」

以前、サラの言うことを聞いて、ハガルのところに入りましたが、今回は、サラの言うことは、主のみこころにかなっていません。アブラハムにとっては、心痛の極みです。自分の息子ですから。しかし、それでも主の言われることを行わないといけません。このように、肉というものは、どんなに良いものであっても、御霊によって断ち切らないといけません。ことがあります。(マタ 10:34-37 参照)

ガラテヤ書でも、イシュマエルのような肉の子孫が、約束による御霊によって生まれた子孫と共に神の国を受け継ぐことはないことを、パウロが話しています。「4:30-31 しかし、聖書は何と言っていますか。「女奴隷とその子どもを追い出してください。女奴隷の子どもは、決して自由の女の子どもとともに相続すべきではないのです。」³¹ こういうわけで、兄弟たち、私たちは女奴隷の子どもではなく、自由の女の子どもです。」

¹³「しかし、あの女奴隷の子も、わたしは一つの国民とする。彼も、あなたの子孫なのだから。」

そうです、主はアブラハムに、何度となく、イシュマエルの子孫も、国民となり、祝福することを約束されています。アブラハムは、このことについて主に任せます。私たちも同じです、身を切るような決断をする時、自分がつながっていたもの、自分がいなければどうなるのか？と思われるものは、明け渡していいのです。主が何とかしてくださるのです。

その大きなものの一つが、「信じていない家族はどうなるの？」ということです。他の家族が、信じていないから、私だけが信じることができないと感じる人々が多いです。あるいは、信じたけれども、イエス様が戻ってきてほしくない、なぜなら、家族がまだ救われていないからだとして、主イエスがすぐにでも来られるのを信じることに、ためらう人たちがいます。そういったことは、主にお任せするのです。

3C 声を聞かれる神 14-21

¹⁴翌朝早く、アブラハムは、パンと、水の皮袋を取ってハガルに与え、彼女の肩に担がせ、その子とともに彼女を送り出した。それで彼女は行って、ベエル・シェバの荒野をさまよった。

アブラハムは、パンと、水の皮袋だけ渡して、イシュマエルと共にハガルを送り出しました。最低限、次のオアシス、井戸のあるところまでに間に合う水だけ与えました。ところが、問題は、さまよったことです。「ベエル・シェバの荒野」とあります。後に、ここでアブラハムとアビメレクが誓いを立てるところがベエル・シェバですが、そこからネゲブが始まり、沙漠になり、人が住むことのできないところに入ります。

¹⁵皮袋の水が尽きると、彼女はその子を一本の灌木の下に放り出し、¹⁶自分は、弓で届くぐらい離れた向こうに行って座った。「あの子が死ぬのを見たくない」と思ったからである。彼女は向こうに座り、声をあげて泣いた。¹⁷神は少年の声を聞かれ、神の使いは天からハガルを呼んで言った。「ハガルよ、どうしたのか。恐れてはいけない。神が、あそこにいる少年の声を聞かれたからだ。¹⁸立って、あの少年を起こし、あなたの腕でしっかり抱きなさい。わたしは、あの子を大いなる国民とする。」

ハガルは、もうこれで終わりだ、と思いました。しかし、かつてサラによって苦しめられ出て行った時に、捜して、やってきた主の使いがおられました。ここで、神の使いが、やってきました。そして教えているのは、「神が、あそこにいる少年の声を聞かれた」のです。イシュマエルが、祈りにならないうめきの声だったかもしれませんが。しかし、主は聞かれました。彼の名前は、「神は聞く」というものです。主は、私たちのかすかな声、祈りにならないぐらいの声も、聞かれます。

¹⁹神がハガルの目を開かれたので、彼女は井戸を見つけた。それで、行って皮袋を水で満たし、

少年に飲ませた。

そうです、目の前に井戸があったのです。彼女があまりにも悲しんで、見えなくなっていました。私たちも、そのように見えなくなっている時があります。祈りさえすれば、見えなかったものが、見えることがあります。

²⁰ 神が少年とともにおられたので、彼は成長し、荒野に住んで、弓を射る者となった。²¹ 彼はパランの荒野に住んだ。彼の母は、エジプトの地から彼のために妻を迎えた。

ベエル・シェバの荒野よりも、もっと南にあるのがパランの荒野です。そこで、イシュマエルは育つようになり、そこで弓を射る者となりました。16 章 12 節には、主が、「彼は、野生のろばのような人となり、その手は、すべての人に逆らい、すべての人の手も、彼に逆らう。彼は、すべての兄弟に敵対して住む。」と言っておられましたね。

2B 祝福ゆえの誓い 22-34

そして次は、20 章の話に戻ります。アブラハムの住んでいるところ、アビメレクが支配していますが、彼とアブラハムが契約を結びます。

1C 神の証し 22-24

²² そのころ、アビメレクとその軍の長ピコルがアブラハムに言った。「あなたが何をしても、神はあなたとともにおられます。

これは、神の証しです。アブラハムに神が共におられることを、異教徒であるアビメレクが認めています。そして、ここで軍の長ピコルも連れて来ています。ということは、安全保障上の危機感も抱いているのでしょう。ここで、アブラハムと平和の合意をしておかないと、自分たちが危ういと思っているのだと思います。このように、私たちが世にいて、そこで神が共におられるのだということが、世の人に分かるようになる、というのが、証しであります。

²³ それで今、ここで神によって私に誓ってください。私と私の子孫を裏切らないと。そして、私があるあなたに示した誠意にふさわしく、私にも、またあなたが寄留しているこの土地に対しても、誠意を示してください。」²⁴ アブラハムは「私は誓います」と言った。

これは、アブラハムが悪い印象を与えているからです。サラを自分の妹と言って、妻であることを隠して、偽ったからです。だから、裏切ることがないようにという誓いをさせています。アブラハムも、これに同意です。先に言及しましたが、「ロマ 12:18 自分に関することについては、できる限り、すべての人と平和を保ちなさい。」ということです。

2C 井戸の誓い 25-34

²⁵ それから、アブラハムは、アビメレクのしもべたちが奪い取った井戸のことで、アビメレクに抗議した。²⁶ アビメレクは答えた。「だれがそのようなことをしたのか知りませんでした。それに、あなたも私に告げなかったし、私も今日まで聞いたことがありませんでした。」²⁷ そこでアブラハムは羊と牛を取って、アビメレクに与えた。こうして二人は契約を結んだ。

井戸は、先ほどのハガルの件にあるように、なければ死んでしまうという死活的なものです。それでアブラハムも真剣です。井戸を返してくれ、と言っています。

平和の契約を結ぶにあたって、アブラハムは正義を捨てていませんでした。自分の掘った井戸が、アビメレクのしもべたちによって奪い取られていたのです。平和を造るために、正義や公正が捨てられてはいけません。ここが、多くのキリスト者が見誤ってしまうことです。むしろ、正義や公正があつてこそ、そこにまことの平和と秩序が確立されます。

羊と牛を使って契約を結んでいます。これは、15 章ですでに出て来ていました。羊や牛を真つ二つに切って、その間を通るという儀式で、破ればこのようになるという縛りがあるということです。これで、平和条約が結ばれました。

²⁸ アブラハムは、羊の群れから、七匹の雌の子羊を別にしておいた。²⁹ アビメレクはアブラハムに言った。「今、あなたが別にしたこの七匹の雌の子羊は、何のためのものですか。」³⁰ アブラハムは言った。「私がこの井戸を掘ったという証拠になるように、七匹の雌の子羊を私の手から受け取ってください。」

平和条約に加えて、アブラハムは、この井戸の所有権についても、アブラハムのものであるという証拠として、七匹の雌の子羊を与えています。後に、アビメレクのしもべたちが、アブラハムの死後、井戸について争いを起こします。26 章で、アブラハムが掘ったいろいろな井戸をふさいで行き、イサクも新たな井戸を掘り、またそれについて争いをしてきて、イサクはそれでも負けじと掘って、ついに争いが止んだという話があります。26 章です。アブラハムは、主に示されていたのかもしれませんが。しっかりと契約を結び、誓いを立てていないといけないと思ったことでしょう。そうしないと、歴史が塗り替えられてしまいます。

³¹ それゆえ、その場所はベエル・シェバと呼ばれた。彼ら二人がそこで誓ったからである。

ベエルが井戸です。シェバは、二つの言葉の掛詞になっています。「誓う」が「シブア」と言います。それと、「七」が、「シェバ」です。どちらの意味も含む言葉になっています。誓いの井戸であるし、また七匹の雌の子羊を思い起こす言葉にもなっています。

³² 彼らはベエル・シェバで契約を結んだ。アビメレクと、その軍の長ピコルは立って、ペリシテ人の地に帰って行った。

「ペリシテ人の地」とあります。考古学では、ペリシテ人は紀元前 13 世紀頃、東地中海のクレテ島から沿岸地域にやって来た民族だと言われています。けれども、それよりも前にも、別のグループがクレテ島から流入していたと考えられます。

³³ アブラハムはベエル・シェバに一本のタマリスクの木を植え、そこで永遠の神、主の御名を呼び求めた。³⁴ アブラハムは長い間、ペリシテ人の地に寄留した。

アブラハムは、これでペリシテ人たちとの確執がなくなり、ここに長いこと寄留することができました。それを記念に、一本のタマリスクの木を植えます。これは育つのに時間がかかると言われます。それで、長いことここにいることになることを示して、永遠の神、主の御名を呼び求めたのです。

ベエル・シェバが、これから長いこと、イスラエルにとって大切な町となります。イサクは、ここに井戸を改めて掘り、祭壇を造ります。ヤコブが、エジプトに下る時にここに留まりました。イスラエルが約束の地に、エジプトから入ってきた時から、ベエル・シェバは割り当て地の一つの町になりました。そして、いろいろな出来事がここで起こりましたが、イスラエル全土を指すのに、「ダンからベエル・シェバまで」と言われるようになります。

ペリシテ人との確執も、ここで予見されています。後に、ペリシテ人はイスラエルの国にとって、絶えず敵であり、士師の時代のサムソンの戦い、そして何よりも、ダビデとゴリヤテの戦いで顕著になります。主が、私たちに与えている約束が、世において戦いがあり、それが危うくされるところを、自分たちは約束にしっかり立って、戦っていくのを象徴しているような所です。